

論文審査の結果の要旨

氏名：宮 脇 英里子

専攻分野の名称：博士（医学）

論文題名：Optimal Sequence of Local and EGFR-TKI Therapy for EGFR-Mutant Non-Small Cell Lung Cancer With Brain Metastases Stratified by Number of Brain Metastases
(脳転移を有する EGFR 遺伝子変異陽性非小細胞肺癌に対する、局所療法と EGFR-TKI の最適な治療シーケンスについての、脳転移の個数による層別化による検討)

審査委員：(主査) 教授 吉野 篤 緒

(副査) 教授 櫻井 裕 幸 教授 浅井 聡

教授 増田 しのぶ

非小細胞肺癌では脳転移をしばしば認め予後は不良である。Epidermal growth factor receptor (EGFR) 遺伝子変異陽性の非小細胞肺癌では脳転移の頻度が高いことが知られているが、EGFR チロシンキナーゼ阻害薬 (EGFR-TKI) が奏功するために脳転移を有していても数年の予後が見込める。しかしながら、EGFR-TKI の先行は、脳転移に対する治療 [全脳照射 (WBRT) / 定位照射 (SRS) / 手術] よりも生存期間が劣るとの報告もある。一方で、全脳照射は時として QOL に関連した重大な合併症を引き起こすために、適応には慎重な判断が必要である。そこで、EGFR-TKI 先行群と脳転移に対する治療先行群の 2 群を比較検討し、1) 1-4 個の脳転移を有する EGFR 遺伝子変異陽性肺癌において、EGFR-TKI に先行して脳転移に対する治療を行うことの有効性を示すとともに、2) 脳転移が 5 個以上の場合には脳転移に対する治療先行の有用性がないことを導いている。

以上、非小細胞肺癌における脳転移に対する治療方針を提示した重要な研究である。すでに International Journal of Radiation Oncology Biology Physics (Vol. 104, No. 3, pp. 604-613, 2019) に掲載された論文でもある。

よって本論文は、博士（医学）の学位を授与されるに値するものと認められる。

以 上

令和 4 年 2 月 24 日